

11月になりました。本日も熊本労災病院のホームページを訪れていただき、感謝申し上げます。肌寒くなり、朝、病院に着く頃の太陽と東の山稜との距離が短くなっているのをみて季節の移ろいを実感します。八代市の東端に近い五家荘では紅葉もそろそろ見頃かと思えます。

COVID-19感染は、いわゆる「ウィズコロナ」時代が到来しています。熊本県のリスクレベルもフェーズ1に下がり、各病院の陽性者入院準備病床も減りました。当院は2床を用意していますが、直近でもそれが常に空室、というわけではない状態です。発熱外来にも、毎日最低でも数人の患者さんが来られています。コロナ禍では面会禁止が一般的になっていますが、患者様とご家族のふれあいが入院で断たれることは望ましい形ではないと懸念しておりました。感染沈静化をうけて、10月末から患者さんご家族の病床への立ち入り禁止を一部解除しました。あくまでも、「必要物品の受け渡しのため」ということで、ご家族お一人まで10分間、という短い時間ですが、直接患者さんと触れあうことができる時間を作っています。ただ、来館者の健康観察も兼ねて、病棟に上がる前のエレベーターホールなどで行ってきた入館手続きは継続しています。看護師さんたちからも、患者様ご自身からは日頃得られない、身内のかたからの情報を得る機会にもなるという意見もあり、一定の感染持ち込みリスクは怖れつつも、メリットも大きいと判断しました。もちろん、感染蔓延が再燃すれば逆戻りになる可能性は十分あることをご了解ください。

10月は、各種の疾患診療推進のキャンペーンがあり、当院もそれに併せてライトアップや院内での啓発活動を行いました。一つは、臓器移植・提供に関する「グリーンリボンキャンペーン」で、グリーンのライトアップ、もう一つは、乳がんの早期治療に関する「ピンクリボンキャンペーン」で、こちらは、ピンクリボンのプロジェクションマッピングも行いました。館内では、この機会に作った各部署参加の「上をむいて歩こう」ソングの動画を流しています。今後HPでも流しますので、一度ご視聴ください。11月は、糖尿病撲滅キャンペーン「ブルーサークル」運動が行われます。糖尿病罹患者やそれが強く疑われる人は国内で2000万人とも言われます。糖尿病は、当初は全く症状がありませんが、適切な治療をしないまま進行すると血管の障害による、失明や腎不全、足の壊疽など、生活の質維持の障害に直結し、時に致命的にもなる怖い病気です。一方で、新たな治療薬もたくさん出現しています。早く認識して上手に付き合っていくべきがある病気ですので、どうぞ健診などで疑われれば、ご遠慮なく、当院の糖尿病・代謝内科に受診ください。

今はテレビドラマの改編期でお楽しみのかたも多いと思います。今期は、「PICU」と「祈りのカルテ」という医療系のドラマもやはり用意されていて、どちらも、かっこいい若手医師を中心に描いています。「PICU」には、私と同じ小児外科医が出てきますが、以前あった「good doctor」と同じ、東京の私大の小児外科教授が監修しています。数回見ましたが、構成が無理なくよく練られていると感じました。当初、北海道の美瑛町を名前で取り上げて

過疎による医療事情を背景にしたために、「実態とそぐわず、移住希望にも影響するじゃないか」と町の不興をかったようでした。しかし、その後テレビ局と話合いが行われ、良い方向に向かうことが確認された、というニュースもありました。ちなみに、PICU という言葉はまだ広くは知られていないと思います。新生児でも成人でもない、その間の広い年齢層の小児の集中治療を、専門医が専従で行う施設の名前で、Pediatric intensive care unit, の略です。私がこの言葉を初めて知ったのは、約 30 年前の米国留学時でした。留学先の小児外科の教授に、「重症患者が来たから PICU に行け (GO to PICU)」, と言われたときです。英語の発音は、「Go to ピー・アイ・シー・ユー」、ではなくて、「GO to ピックユー」でした。彼ら、米国ではすでに普通に使っている略語でも、日本では聞いた事も無かった私に解るはずがありません。すぐに横にいた看護師さんに、「ピックユー」の意味と場所を聞いて飛んでいったことを憶えています。日本初の PICU は、1994 年に東京の国立小児病院にできました。私は 1983 年に同院に国内留学をしていましたが、新生児 (NICU) とは別に小児全般の人工呼吸管理など集中治療をする病棟 (各科の主治医がケア) はありましたが、専従専門医がいる ICU の形態はまだとっていませんでした。国内ではなお PICU は少ないですが、熊本赤十字病院には 10 年前に設置されています。溺水ややけどなど事故はもちろん、急性肝不全や重症感染症などでの人工呼吸や人口透析を要する状態など、広い範囲の重度集中治療をカバーしています。県内では必要に応じてこの PICU に搬送する流れができています。当院は、救急科はありませんが、小児科、小児外科の専門医が常におり、広い範囲の重症小児にも初期対応が可能で、救命後の集中治療継続のために日赤 PICU と連携する、というようなことが可能です。過去には、小児の腹部外傷の手術を含めた初期治療を当院小児外科で行い、日赤の PICU に救急搬送して救命し得たこともありました。ドラマによって、PICU の認知度が上がり、時間単位で生命リスクがあがる重症小児の治療がいつそう円滑でシームレスに進むようになることを期待しています。

今年は、インフルエンザも流行が懸念され、COVID-19 とともに、ワクチン接種も始まっています。例年通りインフルエンザのワクチン当院割り当ては限られているので、当院かかりつけのかた対象に接種しています。ご希望のかたは、それぞれの診療科にお尋ねください。COVID-19 ワクチンは生後 6 ヶ月以降の小児にも対象が広がっています。こちらに関しては、かかりつけの先生にご相談いただき、必要であれば当院でも接種可能ですので HP をご覧下さい。

今年もあと 2 ヶ月を切りました。とはいえ、熊本労災病院は、日夜変わらず、地域の皆様の健康維持のため走り続けます。病院など罹らないにこしたことはありませんが、もしお身に何らかの懸念などありましたら、いつでも関係の診療科に是非ご相談ください。